

第1テーマ

新世紀の夢を語る（ロータリー100周年を記念して）

上野 孝（横浜）

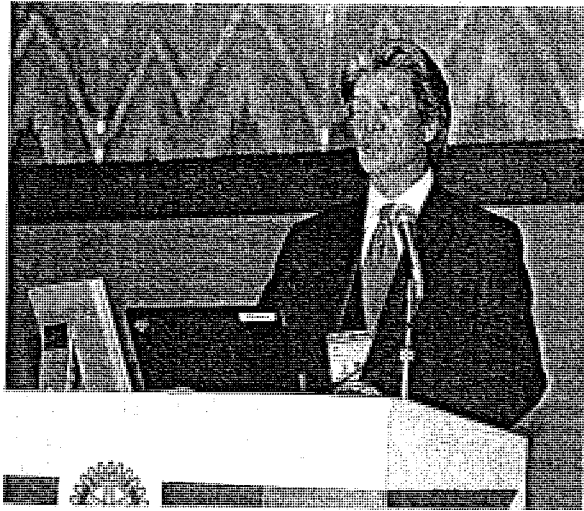
広島での被爆体験から

1945年8月6日朝、母はまだ涼しいうちに私を生まれて初めての床屋へ連れて行こうと家を出ました。しかし私は家を出るや否や大声で泣き始めました。母はやむを得ず一旦家に戻り、私のおむつを変えようとした刹那、今まで経験した事のないような強い衝撃に襲われました。母はとっさに私を抱きかかえて床に伏せたのですが、激しい風圧によって部屋の隅まで吹き飛ばされてしまいました。

しばらくの時間が過ぎて、母が上を見上げると、天井も屋根もなく、青空が見えるばかりでありました。母は飛んできた石礫によって額に大きな傷を負っておりました。額の傷を押さえながら母は私を抱えて、近隣の家に助けを求めるため外に出たのですが、そこで見たものは、破壊し尽くされた周囲の悲惨な状況でありました。

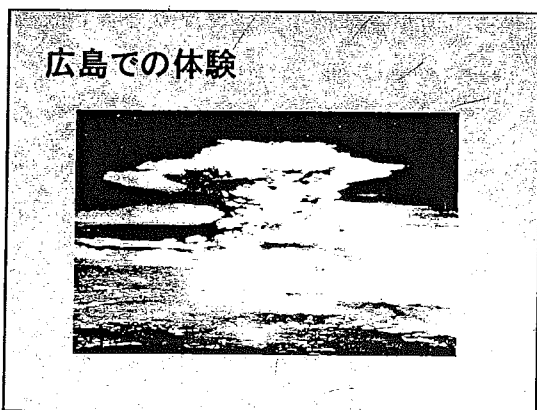
私の父は直接の被爆は逃れたものの、その後被災者の救助作業に携わり、黒い雨を浴びた軍服を一週間着続け、そのために原爆症の症状を呈し、その後2年ほど病床につかなければなりませんでした。

広島に原爆が落とされたとき、私は8か月の赤ん坊でありました。従いまして、これらのことは全て両親から聞かされてきた事ではありますが、



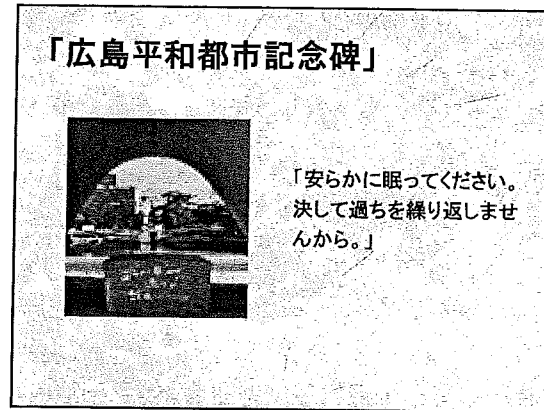
物心付いた頃から何度となくこのような話に接しておりましたので、何時の頃からか両親が受けた体験を、あたかも私自身が鮮明に記憶しているかのように感ずるようになっておりました。

私がロータリアンになりまして暫く経ったある時、海外からの客人を連れ、平和記念公園に立てられた「広島平和都市記念碑」を訪れる機会がありました。記念碑の中の、原爆死没者名簿が納められた石棺には、原爆で命を失った15万人の一般市民への鎮魂の言葉が刻まれております。それは「安らかに眠ってください。決して過ちを繰り返しませんから。」という有名な言葉であります。その言葉はもとより、原爆を落としたアメリカの人々によって刻まれたものではありません。それは命を失った人々と同じ広島市民で、自らも被爆された広島大学の故雑賀忠義（さいが・ただよし）先生によって書かれた言葉であります。私はその言葉の存在は知っていましたが、その言葉が刻まれている石の棺を目にいたしましたのは初めてでありました。その時私の心に浮かびましたのは、人々が相争い、殺しあわなければならないのは、人間性の本質にある憎しみの相乗効果にあるのではない



広島での体験

かということであり、その負の相乗効果を断ち切ることが出来るのは、この被爆者の側から心の叫びとして発せられた「決して過ちは繰り返しません」という言葉しかないのではないかと感じておりました。そしてこの言葉こそロータリーの真髓に触れるものであると感じたのであります。

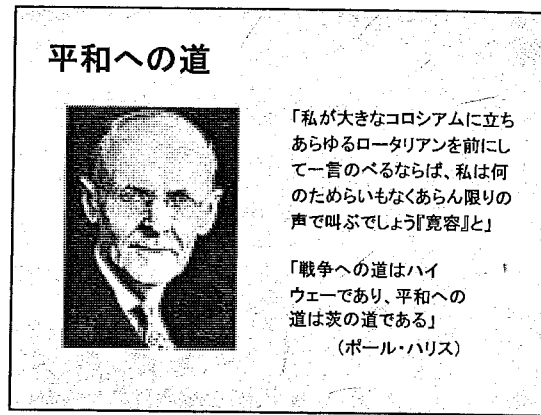


ロータリーの「寛容」こそ世界を変えうる

今世界のいたるところで起こっている悲惨な紛争の様相を見る時、争いを引き起こした当事者が、敵味方の区別なく、その過ちを二度と繰り返さないと共に誓うことができなければ、お互いの平和を実現することは出来ないであります。とくに敗者となったものが、復讐心を捨てて、自らの過ちを認め、戦争を紛争解決の手段としない事を誓う事ができるか否かという選択の中に、永遠の平和に至る困難なそして細い道があるのではないかと思うのであります。「もう過ちは繰り返しませんから。」という言葉はそのことを我々に教えてくれているのではないかと思うのであります。

それはまさに理想主義であり一歩間違えれば敗北主義にも陥りかねない考え方であるかも知れません。しかし日本の広島・長崎以降の歴史が教えてくれているように、それこそがポール・ハリスがいう「平和への茨の道」を切り開いていく事のできる唯一の考え方ではないかと思うのであります。

ポール・ハリスの有名な言葉の中に「私が大きなコロシウムに立ちあらゆるロータリアンを

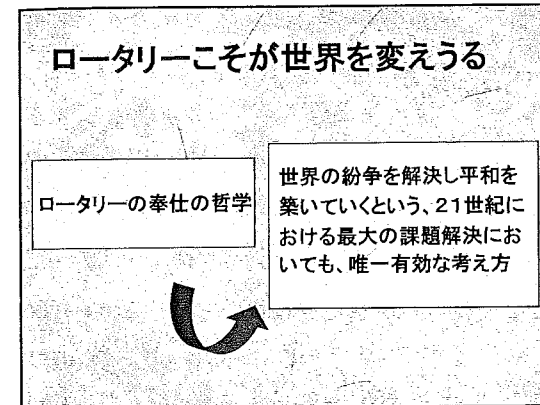
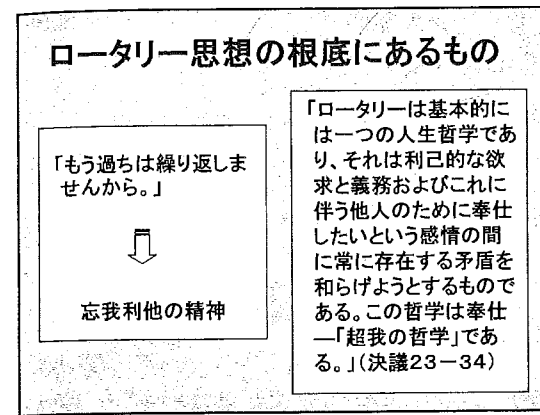


前にして一言のべるならば、私は何のためらいもなくあらん限りの声で叫ぶでしょう『寛容』と。」私はポール・ハリスがロータリーの思想の根本であるとした「寛容」こそが「決して過ちを繰り返しませんから。」という言葉の核心にある心なのではないかと思うのであります。

さらに申し上げればロータリーの「寛容」の哲学は決議23-34に述べられております「ロータリーは基本的には一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情の間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—「超我の哲学」である。」という言葉により具体的に表現されております。ここに示されておりますロータリーの哲学と「もう過ちは繰り返しませんから。」という言葉に深く共通するものを感じるのであります。忘我利他の精神、寛容の精神こそが、世界の紛争を解決し平和を築いていくという、21世紀における最大の課題解決においても、唯一有効な考え方であると感じるのであります。

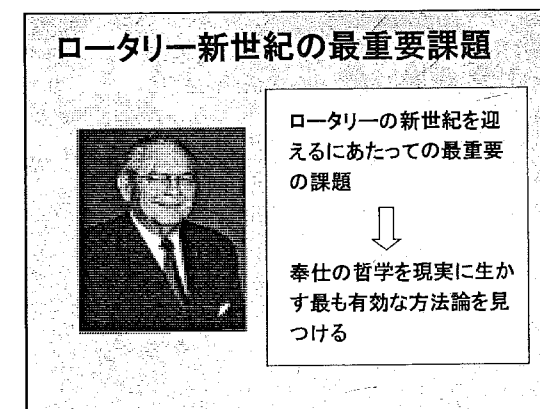
この様に考えて見ますとロータリーの哲学こそが世界平和をもたらすことが出来る、「ロータリーこそが世界を変えうる」と断言しても良いのではないかと思うのであります。

ロータリーの新世紀像を考えますときにロータリーの奉仕の哲学を根底におかねばならないことは強調しすぎてもしすぎることはないと思える次第であります。



ロータリー新世紀の最重要課題は方法論の変革

このようにロータリーの哲学が新世紀を迎え、世界平和の構築においても、より良い世界の創造のためにも、さらに重要性を増しつつあることは疑いのないことであります。しかしそのロータリー哲学を具体的に実践していくための方法論については、ロータリーは大いなる変身を遂げなければならないと考えております。



方法論の観点から一例として国際奉仕を取り上げて見たいと思います。

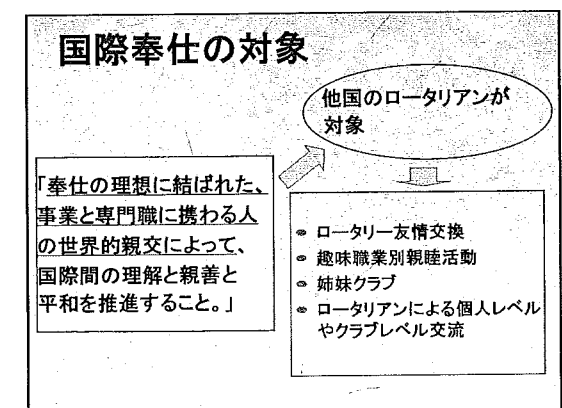
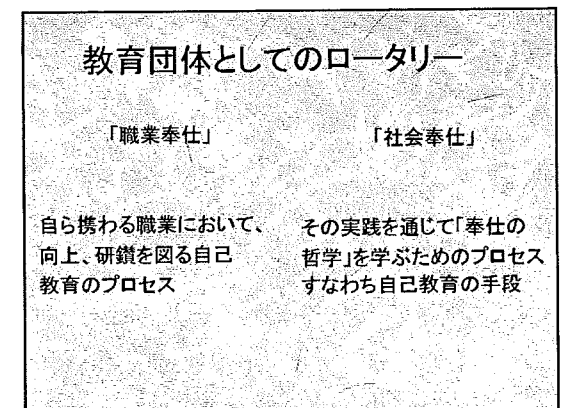
国際奉仕の概念は第一次世界大戦の経験に立

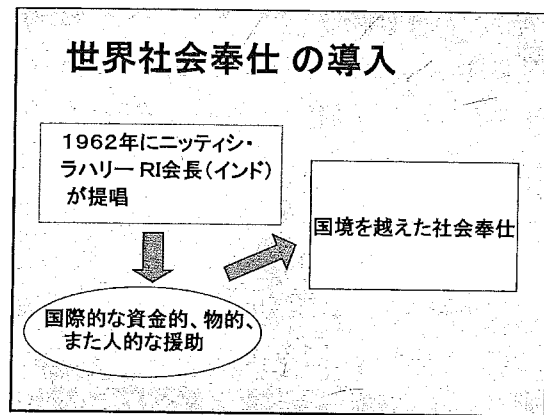
脚し、世界中のロータリアンが理解と親睦を通じて世界の平和を保つことができないだろうかという発想に端を発しておりますことは、周知のとおりでございます。

国際奉仕の理念はロータリーの綱領第四項に「奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること。」と定義されております。この定義によれば国際奉仕とは、「国家という枠組みを越えて、ロータリアン同士が友情を結び、国際理解、親善、平和を推進すること。」ということになります。

ここで注目すべきは国際奉仕の対象となるのはあくまでも他の国のロータリアンであるということでもあります。従いまして綱領を字義通り解釈いたしますと、いわば正しい国際奉仕というものは「ロータリー友情交換」「ロータリー親睦活動」「姉妹クラブ」「ロータリアンによる個人レベルやクラブレベルの交流」などの国際的なロータリアン同士の理解と親善を深める相互教育のプロセスであるということになります。

これに対して世界社会奉仕の考え方は、比較





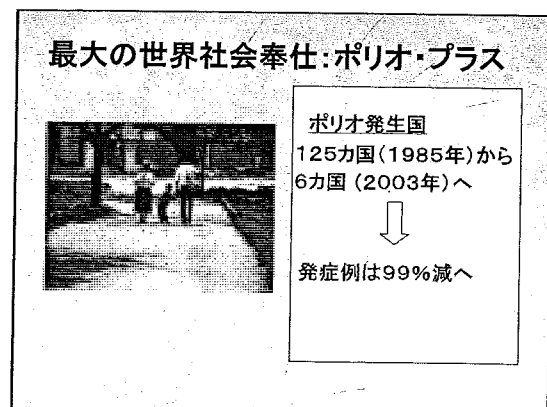
最近になって導入されたものであります。1962年にニッティシ・ラハリーという当時のインド出身のRI会長によって提唱されたということであり、世界社会奉仕は、国際的な資金的、物的、また人的な援助という側面を強調しております。

最大の世界社会奉仕「ポリオ・プラス」がもたらしたもの

世界社会奉仕の面で現在ロータリーが行っている最も大きなプロジェクトは、申すまでも無くポリオ・プラスの事業であります。

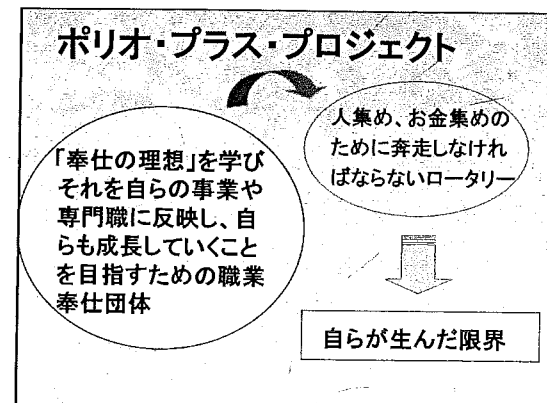
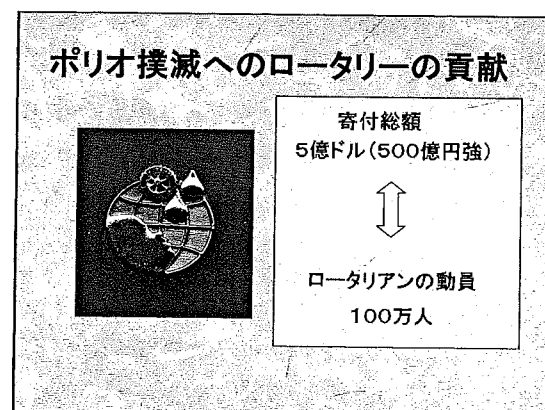
その成果は「ロータリーがポリオ・プラス・プログラムを開始して以来、ポリオ発生国の数は、1985年の125か国以上から6か国に減少しました。さらにポリオ症例数は1985年から99%以上も減少しました。」という今年初めに発表された国際ポリオ・プラス委員会の声明を見ましても明らかな通りであります。

このような結果を得ることができたことはすばらしいことでありますし、ロータリーが100周



年を迎えるにあたって大変立派な成果を挙げた事業であるロータリアンとして心から誇りに思うものであります。100周年に向かって何とか最終的勝利を取めることが出来るよう最後まで真剣な努力をしていかなければならないと考えております。

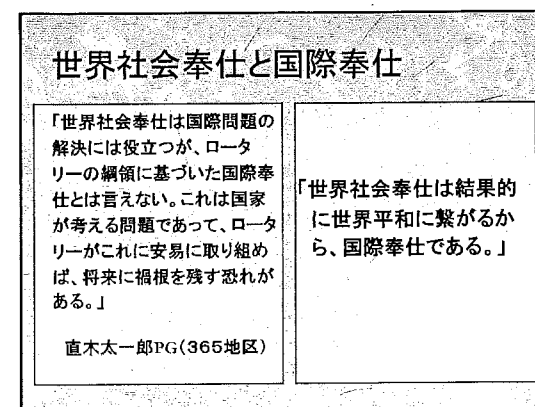
この様に私はポリオ撲滅に果たした素晴らしい貢献を高く評価いたすものであります。しかし新世紀のロータリー像を創造していく中においては、ロータリーが20年前にこのようなプロジェクトに乗り出したことによってロータリー自体がその本質を変えることを余儀なくされていったことも考えなければなりません。ポリオ・プラスのために1985年以降2005年までにロータリーが集めることになる寄付の総額は邦貨にして650億円と考えられており、また延100万人以上のロータリアンがポリオ・プラスのプロジェクトに実際に参画してきたということになると言われております。このような巨大なプロジェクトに取り組むためにはどうしても会員を増やし、寄付を募る基盤というものを常に大きくし続けていかなければならないという宿命を



負うことにもなるのであります。

神戸ご出身のPDG (365地区)である直木太郎氏は「世界社会奉仕は国際問題の解決には役立つが、ロータリーの綱領に基づいた国際奉仕とは言えない。これは国家が考える問題であって、ロータリーがこれに安易に取り組めば、将来に禍根を残す恐れがある。」ということをおっしゃられます。これに対しては当然「世界社会奉仕は結果的に世界平和に繋がるから、国際奉仕である。」という反論がなされたのでありますが、現在のロータリーの状況を見てみますと、直木PDGが述べているような考え方も、新世紀のロータリーを考える上でよく吟味してみる必要が出てきているのではないかと思います。

「世界社会奉仕」によって世界をより良きものに変えようとロータリーが信じて今日まで突き進んできた結果として、それがロータリーの組織の肥大化を不可避なものとし、またお金を集めることを最重要課題としなければならないロータリーへの変質を余儀無くさせたことも事実であると言わざるを得ません。本来のロータリーは「奉仕の哲学」を学びそれを自らの事業や専門職に反映し、自らも成長していくことを目指すための団体であったはずでありました。そこには人数や集めたお金の額に依存することのない「無一物無尽蔵」とも言うべきロータリーのパワーがあったように思います。

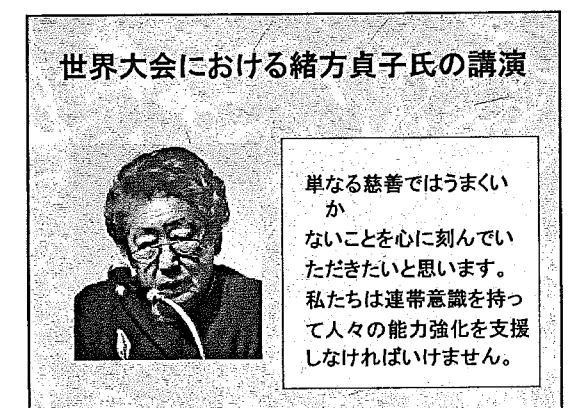


ロータリーの新しい定義の必要性と教育奉仕の展開

先の大阪における国際大会において前国際難民高等弁務官であった緒方貞子さんは「手を貸そう」という講演の中で、次のように述べられております。

「単なる慈善(チャリティ)ではうまくいかないということを心に刻んでいただきたいと思えます。弱者を守る具体的な手段としての連帯意識がなければ、慈善は、必然的に、特定の人を排除したり、差別したりします。この排除の中にこそ、社会を内部から崩壊させてしまう、分裂と紛争の種があるのです。私たちは連帯意識を持って人々の能力強化を支援しなければいけません。」

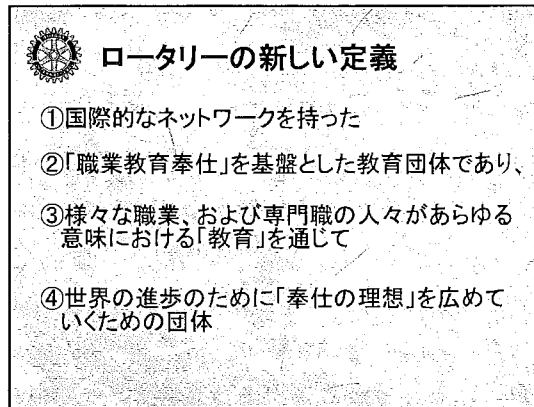
この様に緒方さんは単なる慈善ではうまくいかない、教育支援が必要であるということをおっしゃられました。その教育は二重の意味を持っている。1つは恵まれない人々との連帯意識を育むために自らに課す教育と恵まれない人々の側における能力開発のための教育ということになります。



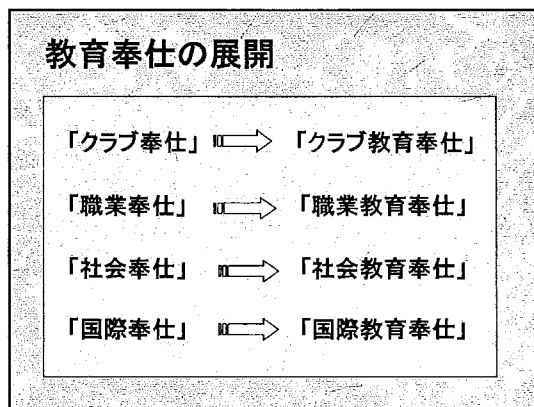
ここに新世紀においてロータリーがその「奉仕の哲学」を最も本質的な形で実践に移すことの出来る鍵があるように思うのであります。

私は、ロータリーを「国際的なネットワークを持った教育奉仕団体であり、様々な職業、および専門職の人々が「奉仕の理想」を教育普及することを通じて自己とそれを取り巻く世界をよりよきものに変えていくために活動する団体」

と定義し直すべきではないかと考えております。そのような新たな定義に則ったロータリーは教育を中心に活動を行うことが必要であります。

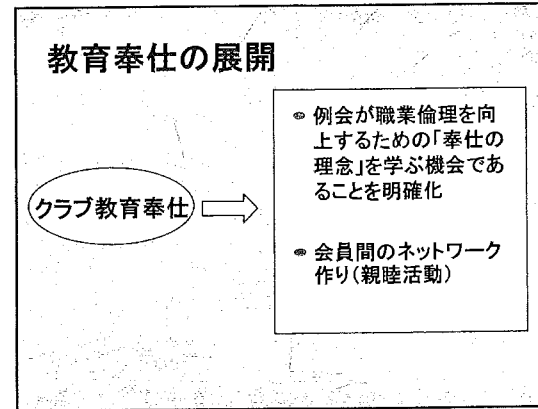


ロータリーの4大奉仕全てに教育ということをつけ加え「クラブ奉仕」を「クラブ教育奉仕」、「社会奉仕」を「社会教育奉仕」、「職業奉仕」を「職業教育奉仕」、「国際奉仕」を「国際教育奉仕」とすることがロータリーの本来の目的によりかなう道ではないかと考えるのであります。

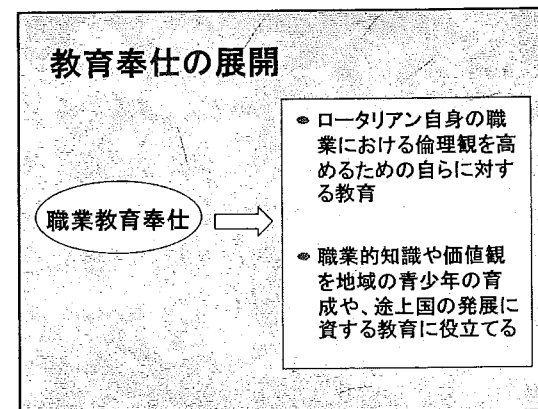


「クラブ教育奉仕」とは、様々な職業を代表するロータリアンが、毎週一回開かれる例会に集まり、お互いの職業倫理を向上するための「奉仕の理念」を学ぶことを第一義とする機会であることを明確にします。その前提としての会員間のネットワーク作り（親睦活動）は不可欠のものであります。

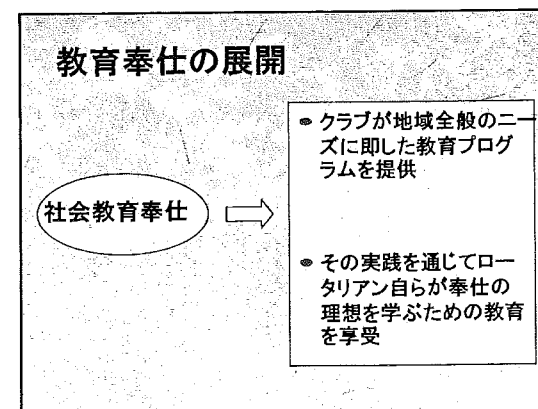
「職業教育奉仕」は第1にロータリアン自身の職業における倫理観を高めるための自らの心を養うための教育、第2に自分の職業的知識や価値



観を地域の青少年の育成や、途上国の発展に資する教育に役立てることを目的とします。

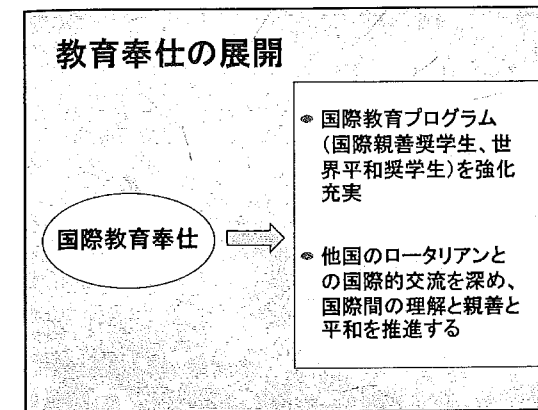


「社会教育奉仕」とはクラブが地域全般のニーズに即した教育プログラムを提供し、その実践を通じてロータリアン自らが奉仕の理想を学ぶための教育を享受することです。



「国際教育奉仕」は現在行っている「国際親善奨学生」「世界平和奨学生」のような国際教育プログラムを強化充実し、その実践を通じて他

国のロータリアンとの国際的交流を深め、国際間の理解と親善と平和推進のための相互教育を行うこととあります。



このようにロータリーの価値ある資源を「教育」の分野に「集中と選択」を行い、教育奉仕プログラムを主体とした、新世紀のロータリー

像をうちたてるのが、新世紀においてロータリーの「奉仕の哲学」をより広範により深くそしてより効果的に実践をしていくことの出来る道であり、新世紀におけるロータリーが更なる新しい可能性を發揮することが出来る道と確信いたします。

分科会におきましては、私のつたない話を発展・展開していただき、小船井PDGより「10年後 ライブドア堀江社長がロータリークラブに入会」というチャレンジングなタイトルの元に、前川昭一PDGよりロータリーが教育改革に果たすべき役割という観点から、そして前窪貫志PDGがご自分の地区で推進されている教育改革の実践的な進め方という観点から、新世紀のロータリー像を論じていただくことになっております。どうかご期待をいただきたいと存じます。

